
幻想と魔法の協奏曲

天宮翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想と魔法の協奏曲

【Nコード】

N7926Y

【作者名】

天宮翔

【あらすじ】

桜芽吹く春の季節。

海鳴市にある聖祥大付属小学校に通う新三年生の神城ユウヤは、新しいクラスに不安を覚えた。聖祥が誇る三大美少女の高町なのは、アリサ・バニングス、月村すずかと同じクラスになってしまったのだ。このクラス分けに学園の陰謀を感じつつもとりあず決まったものは仕方ないと平静を保っているが、後に彼は様々な事件に巻き込まれていく

《この作品は忘却の魔法使いの改訂版です》

ブローグ

木々茂る森にて空を眺めていた。

桜咲く大木の枝から見る空は美しく、月見酒を足しにしても良いほどの星の海、黒き常闇の世界が視界に広がる。

どこまでも広がる闇海の空に怪しさを覚えるも、その美しさには感嘆を覚える。

「月夜には杯を交わすのもまた一考、と云うのもあながち間違いとは言えないね」

「ふふふ。そうでしょ？ こう云う日に呑む酒は美味しいと相場が決まっているのよ。それに、桜を見ながら月を見ながらお酒ってロマンチックじゃないかしら？」

「……ん。確かに間違えではないし、ロマンチックとも思っけど、子どもに酒を薦めるのは頂けないと思うよ」

年にして10を満たした程度の少年が片目を瞑り、枝の上で御猪口を手に呆れたように苦笑を零した。

対して相手は夜闇から上半身しかない化け物と言えなくもない、年齢不詳の美しい金系の髪、ナイトキャップ、チャイナ服を改良したものを着た女性であった。

そんな彼女はもうそんなことは気にしないと、可愛らしくも酒を薦める。

「だから何故薦めるんですか？」

「別に？ 呑み終えたから御酌する。ただそれだけよ。他に意味があるかしら？」

酌をしながら不適な笑みを浮かべる妙齡な女性。二次成長を迎え

る男性たちにその姿は目の毒であろつ。

「せめて年齢制限は考えて欲しいのだけどね」

「私にそれを言っても『はい、そうですか』とは言わないのも忘れずね」

「……もう良いよ」

御酌されたものを“すつ”と呑む。

お酒特有の酔いというものは感じないが、ただ一点を見据えながら呟く。

「学校、か」

明日から新学期に入るためこのような（法律上飲酒は20歳から）ことをやっている場合ではない、と内心苦笑した。

「そうね。明日から貴男はこちらに來れないのよね」

「まあ、今現在でここに居るのも不思議でならないけど」

「それは仕方ないわ。貴男の存在の境界が曖昧なのだから此処に居ると同時に向こうにも、その存在は認識できるの。本来なら有り得ない特異な存在だからよ」

「特異、ね。否定はしないけど、どうもむず痒いよ」

「そうかしら？ けど、そうね。確かに貴男は此処に來るべき人間じゃないわ。神隠しに合わない限りね」

どこからともなく扇子を取り出し、口元を隠す。その下には小さな微笑を浮かべているのだろつ。

また意味深い言葉だが、その意を理解している僕にとっては何を今更と一言物申したいところである。

「……さて、他のみんなにも挨拶していかないとならないし、僕は行くよ?」

これ以上の会話は無意味だと判断し、木から降りた。無理やり過ぎたかもしれないが、これも時間が押しているのだから仕方がない。彼女だけに時間を割いている訳にもいかないのだから。

「ええ。貴男をずっと縛り付けていたいのだけど、後で痛い目に合うのだけは嫌だしお開きにしましょう」

だが彼女はその意をすんなり受け入れお酒と御猪口を引つ込めた。同時に上半身しか露わにしていなかった体が姿を表し、夜だというのに日傘を携えて僕の前に立つ。

「また来るのでしょうか?」

「わからない。確約できるものじゃないから曖昧な答えしかだせないよ」

寂しげな表情を見せるが、彼女の素顔を知る身ではあまりに感動できないのは人徳の差と言うべきなのだろう。

「そこは『絶対』と言つべきところですわ。女心を知らない殿方に育ちますわよ」

「『ですわ』って……。そういう君は僕を子どもと見てないよ。お酒に口調、果ては自分で言つてて馬鹿馬鹿しいな」

「うふふ。だって貴男は子どもっぽいところが無さ過ぎるもの。まるで男」

「いやいや、僕は男だからね。男以外の何ものでもないよ」

そう反論するが呆れたような顔で“そうね”と言われる。

僕はその呆れ顔に納得がいかなかったが、話にならないと思いいれ以上は突っかかることをしなかった。

互いのやりとりが止まり、無言が続くという奇妙な空気が流れ話しが続かない。

だからここが切りどころだろうと思い、餞別の言葉を投げた。

「それじゃあ、ね」

「……ええ。さようなら。貴男なら幻想郷は何時でも歓迎するわ。また来なさい」

「ああ。何時か来るよ、紫さん」

呆気ないやりとりだがこれは今日に始まったことではない。

うまく言葉には出来ないがこれこそ僕と彼女の別れの挨拶だった。

彼女に背を向け、僕は森から外へ向かう。明日から新学期 憂鬱である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7926y/>

幻想と魔法の協奏曲

2011年11月23日17時50分発行